

熊本地震で被災した外国人

災害時の経験共有計画を立ち上げ

ミャンマー留学生のカイザーさんから

14日、熊本地震発生から1年が経った。最大震度7を2回観測した同地震は、熊本県内だけでなく九州地域に大きな爪跡を残し、現在も復興作業が続いている。熊本市内に住むミャンマーからの留学生で、熊本大学薬学部博士課程後期に在籍するカイザー・ウイミンさん(31)も自宅アパートで被災した。混乱する状況の中で避難したが、外国人に対応した情報が少なく、災害発生時に在日外国人らには対応することが難しいという現実を直面した。この経験から他の留学生らと災害時の経験を共有するプロジェクト「KEEP(The Kumamoto Earthquake Experience Project)」を立ち上げ、カイザーさんは副会長に就任。ワークショップや意見発表などの事業を行い、同県在住外国人の被災経験から、将来的に天災が起きた際に在住外国人らがどのように行動すれば良いかを学んでいく活動を行っている。



KEEPのメンバーと(右から2番目がカイザーさん)

最初の地震が起きた昨年4月14日、自宅アパートにいたカイザーさんは、近くに住む友人らと避難所へ避難した。避難先には人数制限などがあ



地震後の熊本市内(写真提供:カイザーさん)

り、自宅でゆっくり眠り、自宅でゆっくり眠りたかったカイザーさんは翌日、自宅へと帰宅。しかし、日本語を話せない友人らから「避難所へ一緒に来てくれ」と請われ、その晩も避難所へ避難した。そして、日付が変わった16日午前1時36分に震度7の大地震が発生。「死ぬかと思った。今思えば避難所へ行っ

て良かった。帰宅したら窓が粉々に割れ、電気は使えない状態。家に残っていたら一人で負傷していたかも

れ、その晩も避難所へ避難した。そして、日付が変わった16日午前1時36分に震度7の大地震が発生。「死ぬかと思った。今思えば避難所へ行っ

た。この経験を通じてカイザーさんが痛感したのは有事の際、外国人に向けた英語での情報が少ないこと。カイザーさんは日本語が話せる友人ら全員が日本語が話せるわけではない。同県内に住む外国人も同様だ。最初の地震が起きた際は日本語でしか情報が流れず、日本語が分からない多くの同県在住外国人は余計に混乱し、不安な時間を過ごした。また、災害発生時に備えた準備や非難方法などの外国人向けの指導も不足しているという。同時に「在住外国人ら自身の災害への意識も低い」とカイザーさんは指摘した。

「プロジェクト」が立ち上げられた。カイザーさんは「天災を予期したり、防ぐことはできない。過去の経験から学んで、天災が起きた際は被害を少しでも小さくするために備えることが必要だ」と思う。プロジェクトの狙いを話す。

活動の一環として昨年7月には、カイザーさんらのような外国人留学生や同県在住外国人、日本人学生約40人が参加したワークショップを開催。地震時のそれぞれの経験を共有した。また、震災時に困ったことや疑問だったことなどに関するアンケートの収集や県内の高校での講演を実施。今年2月には一般財団法人自治体国際化協会(CLAIR)での発表も行い、